

附 録

大久保公と土木公債

(昭和9年2月15日土木學會通常總會に於ける講演)

衆議院議員 伊藤仁太郎

惟ふに日本に於ける土木事業に關する公債政策は、大久保公が、最初の人やうに考へます。そこで先づ大久保公の人柄——明治維新前から維新後に互る、經歷の一端を述べて、その人柄を、初めに偲んで見たいと思ひます。

非常に優れた、政治家であつたと云ふことは、申す迄もないのでありますが、松平春嶽公が、大久保公を批評しました文書がございます。併せて三傑を論じて居りますが、餘り世間に廣く傳つて居らない文書であります。それに春嶽公は斯う云ふ風に書いて居ります。

大久保利通は、古今未曾有の英雄と申すべし。威望凛々、霜の如く、徳望は自然に備へたり、木戸、廣澤の如きものにあらず。力量に至つては、世界第一と申すべし。余が大久保を稱讃するは、衆人の稱讃とは違へり。支那の談判、江藤の討伐、その他公の事業に種々あれども、余の見る所は、御一新也。

歴史上を見よ。漢の蕭何も豪傑なれど、高祖といふあり。周公且も賢人なれど、武王あり。唐の太宗には魏徵あり。日本も、足利尊氏、頼朝、信長、太閤、家康公の臣下には、英雄もあれど皆主人の英雄豪傑あるを以てなり。

この時聖上は御幼稚にあらせられ、三條、岩倉公も、今日の前公にあらず、徳川の處分、封土奉還、廢藩置縣並に西京の皇居をやめ、首府を東京として、函館戦争その他、外國交際、第一日本全國の人心を鎮定して、その方向を定む。皆大久保一人の全國を維持するに依れり。新維の功業は、大久保を以て第一とする所以なり。

御一新の功は、大久保もとよりなれど、大久保一人の手にては、仲々成り難し。衆人の協力とは申しながら御一新の功勞に智仁勇あり。智勇は大久保、智仁は木戸、勇は西郷なり。この三人なくんば、三條公、岩倉公の精心あるとも、貫徹せざるべし。

斯う云ふ風に春嶽公は申して居ります。この批評は仲々長いものですが、これだけでも、春嶽公の大久保觀の一端は、見ることが出来るのであります。その他、勝海舟が大久保を矢張論じて居りますが、論調はこれと同じやうなものでありまして、社會的に見て、第一流といはれるやうな偉い人、斯う見て居ります。大久保は概して、さう云ふやうな方でありました。

只、人として見た大久保といふ方には、極めて窮窟な物事を箱に詰めて扱ふ、といふやうな氣持があつた。従つて、その性格も、非常に嚴肅な人でありまして、大久保公はあれだけの政治家である、あの人の爲に、生死を共にするといふ乾分は、只の一人もなかつた。西郷に比較して、劣れる點は、さう云ふ所だらうと思ひます。木戸にしても、亦西郷に致しましても、これは少し多過ぎて困る位に、生死を共にする乾分がありました。大久保には一人もなかつた。

それは見様によりますと、よいともいへる。語り嚴肅な性格であつたが爲に、魚が集つて來ない。水清ければ魚棲まずといふが、大久保といふ人はそれに當嵌まると思ふ。

丁度西南戦争が濟みまして、岩崎彌太郎氏が、一朝にして富をなした。その挨拶に方々廻つた後で、最後に大久保を訪ねた。彌太郎氏の懐ろには、何物か入つて居つたが、それをどうしても出すことが出来なかつた。それで世事雜談をして、空しく歸つて來て仕舞つた。けれども外には、ずつと禮に歩いて居る譯ですから、他日これ

が判るに定まつて居る。岩崎も、それに気がとがめたものと見えて、又持つて行つた。3 回か 4 回、持つて來たが、到頭それを出すことが出来なかつた。そこが大久保さんの性格の一端の現れで、贈物を出すだけの隙を、自分の體に見せなかつたといふ、そこが矢張り、乾分の集つて來なかつた原因であらうと、斯ういふ風に、私は考へて居る。

併し私共が、始終調べて居る關係から申しますと、維新のあの 大鴻業といふものは、3 傑が、中心になつてやりました。學問からいへば、3 人が一つになつても、玉松操に、遠く及ばなかつた。勇の點では中岡慎太郎、坂本龍馬に及ばなかつた。けれどもそれは只、智勇には優れて居たといふだけで、天下の人心を收攬して、大なき仕事を成し遂げる、といふ側ではなかつた。その點からいふと、どうしても、3 傑といふ所に目星がついて行かなければならぬと思ふ。

そこで總てを切離して薩藩といふ立場から申しますと、西郷が薩藩を代表して、あれだけの事業をなしました。若し大久保が居なかつたならばどうだらうかと思ふ、大久保が居なかつたならば、西郷のあの活動といふものは、途中で止つて居たらうと思ふ。

何れの時代にも、金が先きに立つ。どんな、えらい人であつたにしても社會に立つて一の仕事をしやうといふには、大勢の人を、集めなければならぬし、金も使はなければならぬ。殊にあの時代の浪人とか、天下國家を口にして居る者は勿論貧しい者であつた。大抵各藩を通じて、お目見得以下の士が多かつた。藩に居て衣食して居つた者が藩を離れて、一定の職業がなければ、懐ろ具合の淋しいのは當然です。さういふ人をじつと引締めて行つて、それを手先にして働かせるといふ上には、どうしても金の力でなければならぬ。その金はどうして西郷に出來たらう。それは第一に、考へなければならぬことです。

京都あたりに残つて居ります、西郷の書いた書面を見ますと、大半が金の問題です。借を返した禮狀が貸して呉れるといふ手紙か、申譯の手紙か、手紙の大半はそれです。如何に西郷が金の爲に苦心したかといふことは、さういふ手紙を見ると、よく判ります。

そこで大久保といふ人は島津久光公に、早く喰附いてしまつたが、その時代の 武士氣質から申しますと、大久保が、久光公に接近するといふことは無理なことです。

それはどういふ譯かといふと、嘉永年間に島津家に相續争ひがあつた。齊彬公と久光公の相續争ひで、一般には、これをお由良騒動と言つて居りますが、その騒動に大久保の父次右衛門といふ者が、關係があつたから、流罪處分になつて居る。次右衛門は、齊彬公に重く用ひられて居たばかりでなく、この騒動には、齊彬派として立働いた爲に、處分されたのである。齊彬が死んで、久光の子忠義が、藩主になつた結果、久光は藩の後見となつた譯である。従つて、斯様な事情で、父が島流しになつたのですから、武士氣質からいふと、大久保はどうしても久光に接近することの出來ない筈の人であつた。

西郷の方は、父が身分の低かつたが爲に、矢張その仲間ではあつたが、罰を受けなかつた。身分の低い者は斯ういふ時には、都合がよいと思ふが、併しながら、西郷の一家が生活を續けて來たその生活費の大半といふものは、赤山製負といふ國家老の支援を受けて居つた。その赤山が、切腹をして居る。それで自分の體には刑罰は及ばなかつたが、自分の一家を支援しその金を出して呉れた救ひの親である赤山が、切腹をして居る以上、西郷として久光に従ふことは出來ない筈です。

併し、よく世間には久光と西郷とは主従でありながら、どうしてあんなに、仲が悪かつたらうと、不審を抱く人がある。西南戦争で西郷が亡くなつたことを、聞いた時に久光がニヤリと笑つて『さうか』といつた切りで、

惜いとも、可哀さうだとも、仰しやらなかつた。さういふやうな冷やかな態度を、どうして執つただらうかといふことを考へて來ると、そこには、斯ういふ關係があつたからで、又西郷もそれが自分の胸にありますから、久光にはどうしても従はなかつた。

尤もそれは齊彬公に對する彼の忠節が厚かつた、といふ點もあつた。今日でも、残つて居りますが齊彬公から春嶽公へ送つた手紙がある。その手紙の言葉に、『薩藩に西郷吉之助あること國寶あるが如し』と書いてある。それは西郷が、20歳前後の時であります。西郷吉之助が、薩摩にあることは國寶があるが如しといふて、一青年の西郷を信頼して居つた。従つて家定將軍の所に、後の天璋院様が御興入れの際にも、そのお供を仰付けられたので、西郷は江戸城に乗込んで來て將軍に謁見した。

さういふやうに、齊彬からは愛護を受けて居つた外に、自分の一家を支へて呉れた恩人が、久光派と争つて、切腹して居るといふので、西郷は久光に従ふことを、欲しなかつた。それが薩摩の武士教育の残りと思ふ。

所が大久保といふ人は智者です、非常に理想に富んで居た人であつた。それでありますから、自分の怨を忘れて何とかして久光に近附きたいと思つて努めました。大久保が久光に接近することでは、非常に苦勞をした。本當に久光に取入る迄には、約1年掛つた。大久保次右衛門の伴の一藏といふと、あれは俺に背いた、といふことが頭にある。それをすつかり解消して、昔は昔、今は今と、お側に引上げられる迄の、信用を得るのに、約1年掛つた。

その苦勞をした中の一つは、どういふことかといふと、久光公が幼少の時分に、重富の島津家に養子に行つた關係で、久光の碁の先生が、重富のお寺の和尚さんであつた。そこで大久保は、どうかして久光公に取入らなければならぬが、前の關係があるから容易に近附けないといふので苦心して居つたが、これを知つて鹿児島から2,3里ばかりある、重富の和尚さんの許に、碁の稽古に通ひ始めた。和尚さんは久光公の碁の先生である。その間に接近が出来るだらうといふので、随分氣長に考へて和尚さんの許に通ひ始めた。所がその中に、和尚さんはもう年も取つて居るし殿様の下手な碁の相手をして居るのは、自分も嫌だ。そこで1日、大久保を呼んで『お前、殿様の碁の相手になれ、俺はこの頃、實に弱つて居るが、お前は丁度いゝ相手だらうから』といふ。こつちは、それを待つて居たのですから、非常に喜んで久光公の碁のお相手をするやうになつたが、力量は同じ位です。どつちも笨と味噌澁の違ひ位です。久光公も喜んだ。相手が先生では年中負けて居る。偶に勝つたと思ふと、わざと負けて呉れたといふのでいゝ氣持がしない。所が今度は、同じ位の笨ですから、『自分の碁の相手には、一藏だけがいゝ』と云ふのでそれから大久保は、久光に喰込んで行つた。

さういふやうな智者であつた大久保でありますから、久光の急所を握つて、2年ばかり後には、納戸役といふものになつた。これは藩の大藏大臣である。財政の樞軸を握つて、どんな機密にも、携はることが出来るやうになつた。

斯の如く、大久保は久光に對する自分の怨を忘れて、接近したといふ所が偉い所であつて、私怨を忘れて國家の爲に盡さう、といふ考へです。目的は大きな所にあつた。

所が斯うなつたから、西郷の運動といふものは樂になつて來た。今のやうな、會計検査院といふものがありませぬから、算盤の弾き方で西郷の所に、草鞋錢、運動費といふものが、無論行つたものと想像しても間違はない。大久保は、さうして西郷を援けたが、又それ位西郷を信頼して居つたのです。

その證據に、斯ういふことがある。これは慶應の初めですが、久光公の御前に大久保が罷り出て行つた時に、『御承知の如く、吉之助奴が都に出て居ります。今日では殆んど薩藩の代表者として、各藩の間に取扱はれて居る。

彼の信用は、實に偉大なるものである。彼にお委せになりますれば、薩藩の方針を、誤らないだらうと考へます。今日以後は吉之助奴は、あなたの思召で薩藩の代表といふことを、御承知願ひたい。就きましては道程も離れて居りますから、大きな問題で急を要する場合には、西郷獨斷を以て事を決することがありますから、さういふ場合には御一同御老臣を始めとして、大目に御覽下さるやうに願ひ上げます。この儀、お言葉を頂きたい』といふ。これを承知すれば、正式の代表になつてしまふ。久光は心の中では喜ばない。碁の稽古をした者は可愛いが向ふ向きになつて居るといふ氣持がしない。けれども大久保の言葉に依つて、さういふことであれば、許すといふことになりました。

その時分に斯ういふ話がある。『一門老臣と雖も吉之助の取計ひに、嘴を容れないやうに願ひたい』と、念を押した時に、『それ程の大任を持つて居る者に對して、一門老臣と雖も嘴を容れられないといふことは容易ならざることである。それでは一門老臣、あつて無きが如きではないか』と仰せられたに對して大久保は又遠慮なく申上げたといふ。その時は大層むづかしい顔をして、黙つてしまつて、『尤もだ』ともいはなかつた。併しそれから西郷といふ者は公然、薩藩の代表といふことになつたが、それ位大久保は西郷を信頼して居つた。同時にさういふ任務には、西郷が最も適任であるといふ事をよく知つて居たのである。

大久保は、智者でありますけれども、それは薩藩だけの智者であつて、まだ天下には知られて居らない智者です。従つて都に出ましては到底西郷に及ばない。

西郷といふものは齊彬公の愛護を受けましたが爲に將軍に迄、内謁した程である。將軍のお嬢さんの番人として參りました關係で内謁して居る。將軍は高い所に居られまして、籐が胸のあたりまで上つたと思ふと、それで、ガタリと下りてしまつたから、お顔は見へなかつたが、それでも内謁はした譯である。總て齊彬公の名代といふ資格を持つて居るし、御三家の人々とも附合つて、殊に尾州侯が西郷を信じたことは、非常なものであつた。最初の長州征伐の時には、彈を放たずに和睦が出来たのは西郷の力です。尾州侯は嫌々ながら、戦争に出掛けたが西郷に『お前に委せるから』といふので、その斡旋を用ひたから、西郷の力に依つて事はうまく納まり、長州では3家老の首を斬つて、それで済んでしまつた。尾州侯の信頼は非常なものであつた。

それから一方からいふと、西郷は浪人なんかの世話をして居つたが實に快活であつた。頭山さんもさうだが頭山さんは陰性ですが、西郷はあの調子で快活でした。その代りに議論などは、結論だけで、イエス、ノーで、決めてしまふ。それだけに、人から怨を買ふことはない。よく浪人が、天下國家の議論に出掛けて来る。西郷はその話を聽いて、『それは御尤もだ』といふ。今度は別の變つた者が來て話す、『それは御尤もだ』といふ。どつちが本當か分らない。話す方では自分に賛成して呉れたと、思つて居る。併し西郷は本當に議論を、聽いて居るのではない。腹の中では外のことを考へて居る。けれども浪人共が、何をいふても顔では感心して居る。それが浪人の心を收攬した、一の方法であつた。

もう一つは、『更に相済まぬが、少々運動費に差支へるから何兩貸して呉れ』といふと、『オイ』といふので、どんどん貸してやる。これは大久保さんには出来ない。大久保さんは几帳面な人であつた。殊に金銭には几帳面であつた。『一寸、50兩程貸して貰ひたい』『何に使ふか、その使ひ途を仰しやい』といふ。浪人が金の使ひ途をいへるものでない。貸せば貸したで、『この間のものはどうか』と催促する。浪人は決して返へすものでない。大久保にはさういふことが出来なかつたから、自然乾分といふものも出来なかつた。

それから大久保がさういふ性格を殺し、癖を矯めても出来ないことは、西郷は御三家の間に於てもお取次ぎでなく話が出来たが、その對面であつた。是は急には、出来ないことである。

斯ういふことは大久保は賢明だからよく知つて居る。どうしても中央のことは西郷でなければならぬ。俺が出る幕でないと斯う決めて自分は納戸役であるから、西郷に金を出してやつて居た。それで西郷があの大活動が出来たといふのは、これは大久保が蔭に居つたからであります。大概の人ならば、なに俺が出る、といふので、出たがるものですが、出なかつた所に、大久保といふ人の偉い所があつた。

それで維新前の史料を調べて見ましても、慶應以前に大久保が出たといふものは殆んどありません。只柳橋の川長といふ料理屋で、麴を返して長州の土と力業をしたといふ逸話が残つて居るだけあります。西郷の働きは随所に現れて居る。それは大久保が全く蔭の人であり、西郷は表面の人であつたからで蔭の人と表の人とは別であらうと思ふ。

それから大久保といふ人を、政治家として見てもこの頃は批評が變つて来たが、一時、研究者の批評には、鈍重な人で進歩的思想のない人だ、といふことに決められて居つた。所がその履歴に就て、段々調べて見ますと、鈍重どころでなく少し走り過ぎて居る位、ものを取入れるだけの力を持つて居つた。極めて簡単な例を一つ挙げると斯ういふことがある。

明治4年に岩倉さんのお供で、洋行した時分にロンドンのホテルに泊つて居ると、そこへ尋ねて来た人がある。それは大倉喜八郎であつた。考へて見ると大倉といふ人も偉い人であつた。イエス、ノーも分らなくて、ヨーロッパの視察に行つた人であります。實に早い人であつた。大久保が取次の者が持つて来た名刺を見ると、大倉喜八郎と書いてあつて、全然知らない人物である。『どんな人か』『町人でございます』『どう云ふ町人か』『陸軍の御用をする人でございます』。丁度大久保さんは退屈で仕様がなかつた時である。といふのは洋行して居る間でも、大久保さんの部屋には人が入らない、公用の外は入らない。ジツと固まつて居なければならぬから、面白くも何ともない。所が木戸さんの部屋は押返して居る。木戸さん得意の漫談をやつて聞かすから、若い者は嬉しくて仕様がな。皆入つて来るが大久保さんはホテルでもずつと獨りで、淋しい生活をして居た。

そこへ日本人が訪ねて来たのだから、大久保さんは嬉しかつた。『お前が大倉といふのか』『ハイ、私は喜八郎でございます』それから色々な話になりまして、『お前は何しに来て居るのか』『色々商賣上のことでこつちの事情を知りたいと思ひまして参りました』『これからの町人はさうでなければならぬ。一體いつ歸るか』『じきに歸る積りでありますが、どうしても1箇月か2箇月、延びると思ひます』『立入つたことを聞くが、どういふことで延びるのか』『羅紗の製造法を學んで行きたいと思ひます。それを思ひつきました』『どういふ譯でそんなことを考へるか』『上野の彰義隊の戦があつた時には私は車坂に居りまして、あの戦を見て居りました。大層ひどい雨の日でありましたが、將校方、隊長方は羅紗の服でございましたから、あの雨にも堪へましたが兵隊は小倉木綿の筒袖のだん袋でありましたから、雨の爲に肌まで濡れてしまつて、ぐじやぐじやになつて水の中で戦をして居つた。あの戦が1日で終つたから、宜しうございましたが、2日も3日も、續いたならば、兵隊は皆、風をひいてしまひます。その時に私は、これからの兵隊には羅紗を着せなければならぬ、といふことを考へて、こつちに羅紗の製造を研究に参りました。その爲に連れて来た者もありますから、1箇月か2箇月研究して、歸りたいと思ひます。せめてこれからの陸軍の服だけでも、羅紗で造らうと思ひます』『町人といふものはどうもえらい所に氣がつくものだ。よく勉強して歸つたらいいだらう、日本に歸つたら尋ねて来い』『ハイ』と大倉は喜んで歸つて行つた。

所が、大倉が辭去すると直ぐに、次の部屋に居た隨行の1人で、井上省三といふ人を呼んだ。『何か、御用でございませうか』『お前は、私と一緒に歸ることはならぬぞ。こゝに2,3箇月、止らなければならぬ』『ハツ、何の爲で

ございますか』『羅紗の織り方を、研究して来なければならぬ。これからの大切なことであるから、お前残らなければならぬ』『左様でございますか。井上としては、皆と一緒に歸國したいけれど、大久保の言付けだから仕様がな。獨り跡へ残る事になつた。大久保といふ人は、斯ういふ風に物事の實行に敏な人であつた。これが干住に、製絨所の出来た因であります。大倉さんは研究も1通りすんだので、サアこれから、日本に歸つたら、この事業で一儲けしやうと思つて、日本に歸つて来て陸軍省に話をしますと、その必要はないといはれたので頗る驚いた。すつかり大久保さんに、智慧を取られてしまつた譯である。これは鈍重な人には、出来ることでない。

それから富岡の製糸場を造つて、機械で糸を拵へるやうにしたのも洋行の土産であつて、この點から考へても、進歩的な人であつた。只人に接して餘り口敷をきかず、物を決するに手間が掛つた。手間が取れる代りに、一遍決めたらそれを斷行する方といふものは、實に恐ろしいものがあつた。斯ういふ風な人でありましたから、仲々、普通の人とは違つて居る。鈍重でお人好しと思ふとそれは大變な間違ひであると思ふ。

これは箇にさういふことばかりでない。丁度大久保さんが洋行された時には内務卿ではなかつた。大藏卿として洋行したが、大久保さんは算盤に暗い所から大藏少輔に井上馨を自分で採用してある。所が、井上は我が強くて我儘であつたから、自分の留守中に何をするか分らない。そこで維新の人としては一番連れて出て來た大隈重信を、自分の留守中の井上馨の番人にしてしまつた。2人は仲が悪い。この仲の悪い2人を並べたから、何にも出来なくなつてしまつた。このやり方といふものは、實に巧妙なものです。

そこで洋行して歸つて來まして、内閣會議では、色々な問題があり、例の朝鮮問題で、所謂征韓論がやかましくなつた時に『それはいかぬ。今は外に戦に行くとか、そんな所の騒ぎでない。現在の日本には都市といふものがあるかないか分らない。又道路らしい道路が、あるかないか分らない。それらの點から直して行かなければならぬ。戦に使ふ金があつたら、その方に使つて行かなければならぬ』といふて、大いに反對した。これが根本的な、西郷との意見の相違であつた。内が整はないのに、それを捨て、外に向つて手を伸ばすのは、よろしくないといふのです。これに木戸さんが賛成した。

所が茲に面白いことがある。函館戦争の時分に、木戸さんがその外征の計畫を、既に立て、居た。それは文書にも残つて居りますが、大村益二郎に相談をして、『函館戦争は花火のやうなものだから、あんな戦争は詰らない。あれが済んだら、朝鮮と戦をやる積りだからお前行つて呉れ』といつて居た。所が大村は御承知の通り死んでしまつたので、それは出来なかつたが、この點では、木戸さんも、仲々戦好きの、無鐵砲な人であつた。だから征韓の張本人、最初の發起人は木戸さんであつたとも言へる。それが洋行して歸つて來ると、頭がぐるつと變つて大久保さんに賛成をしてしまつた。さうして2人が手を握つて、到頭征韓論で西郷を迫出してしまふ、といふ所までやつた。

さういふやうな譯で大久保といふ人は、仲々ものを見る明があり、見通す力があつたが、然らば、日本の都市といふものをどういふ風に改善するか。その時分には、都市改善といふ言葉はなかつた。その頃に使つた言葉は、内治改良といふことであつたが、それが今では都市改善といふ言葉に變りました。大久保は、先づ第一に都市の改善をしなければならぬといふことを、その時分に内閣で演説をせられた。これは板垣さんから、聞いた話であるが、大久保が斯ういふことをいつて居たといふて、板垣さんの語るには、『面白いことをいふ男で、都を造り變へなければならぬといふことをいつた後で、第一に日本の道路といふものはなつて居らぬぢやないか、西洋やアメリカあたりの道路を見たら、日本には道路といふ道路はない。せめて日本の都の、表通りだけでも石など敷詰める工夫が肝要ぢやないか、といふやうなことをいつて居た』との話であります。それが今日の道路を造るやうになつた因

であります。

さうして、この都市の改善をするといふにはそれを主としてなすべき役所がなければいかぬ、といふ議論が生まれてそれがもとで出来たのが、内務省であります。

記録を御覽になれば判りますが、その時分には、道路の管理も大蔵省でやつて居た。大蔵省の管理で何事もやつて居りました。今の燈臺の管理までやつて居た。さういふやうな有様であつたのを、矢張大久保さんが言ひ出して、内務省といふものが獨立したのです。

さうして今でもさうですが、内閣に於ても内務大臣といふものは政治的に中心勢力にはなつて居るが、位置からいふと、大蔵卿の方が一段上に居た。その大蔵卿を捨てゝ一段下の内務卿になるといふことを、平気でやつて内治の改良といふことに向つて、力を盡して行つたのであります。

今の區劃整理の、小さなものですが、その時分の市區改正を、大久保の案によつて實行したのが、東京府知事の松田道之であつた。丁度、松田道之が東京府知事時代に箔屋町から日本橋へかけて擧げてしまつた。それで、あそこの市區改正をしたがこれが東京市に於ける市區改正の始めでありまして、松田道之が大久保の亡き後に於て、始めて舗装はしなかつたが、市區の改正といふことをやつた。これは皆、大久保の考へたことを、やつたのであります。

斯ういふやうなことを、考へて見ましても、大久保といふ人は決して鈍重な人ではなかつた。又保守一方の人でもなかつた。物事を決めるのには、長く掛るが一旦決めてしまつて、やるとなると實に早い人であつた。

丁度内務卿をして居る時分に、金原明善といふ人が、訪ねて來た。一、二度會つて知つて居る間柄であつた。『金原か、掛ける』『へい』『何だ』『實は今日はお願ひの筋があつて...』『何だ』『ハツ、私の家は先祖代々、天龍川の河岸に家がありますが、天龍川の水害といふものは、實にひどくて年々歳々、それから受ける人畜の死傷、生物の損物といふものは容易ならぬものでございます。これは總て、お國の損害でございます。殊に人畜の損害は打捨てて置くことは出来ませぬ。それで私共村の者が相談いたしまして、治水工事の組合を造つて、やつて居りますが私共微力な者では、到底、録なことは出来ませぬ。今年漸くのことで幾何かの堤防を造つても、それが翌年の雨ですつかり攪はれてしまつて、元の木阿彌で、果てしがありません。そこで色々、苦心して考へました末に、お願ひに出来ました譯であります。どうか天龍川の治水に就て、お上のお力入れを願ひたいと思ひます。この儀如何でございますか』『ウム、天龍川のこと、俺もよく聞いて居る。土州の岡本健三郎が來て話したが、随分ひどいだらう、俺の國の川内川も、出水で苦しんだことがある。定めし困るだらう。併し治水の方法は、どういふ事にするのか』『堤防を築き或は川を濬ふ等可なり大きな工事でございます。それで僅かな人手や金では、到底出来ませぬ。若しもお上に於きまして、お力入れを下さる、といふことがはつきり決まりましたならば、些少なから私の財産の全部を、お上に献納いたします。後は如何様にも、自分一家の者が食べるだけの事はどうかになります。人の爲、國の爲でございます』『成程、それは仲々いい心掛けた、悪いことぢやないのう、もつと詳しく話せ』といふので、金原といふ人は丹念な人でしたから、色々詳しく話した。『よし、折角の願だ、2,3日考へさせて呉れ』『さう早急なことでもなく、宜しうございます、あなたのお耳に入れて置けば結構です、何分宜しく願ひます』『2,3日経つたら呼ぶから、お前の宿所を書記の者に、いつて置きなさい』金原としては、大久保が、快諾するものとは思へない。誰かに言附けるといふ程度であればその言葉を藉りて、お役人達にやらせやう、といふ積りであつた。所が3,4日しますと、直ぐに來るやうにといふ、迎へが來た。早速參りますと、『この間の話は、やることに決めた』『へつ、餘り話が大きくて、只やることに決めたといふだけでは、呑込ませぬが...』『政府で、援助してや

る、心配するな』『やつて頂けますか』『やるが、併し俺は、細かいことは分らないから、其邊は、縣令と相談して、やるがいゝ。縣令は俺が呼んでやる。オイオイ、大迫を呼べ』といふので、直ちに大迫縣令に、電報が打たれました。大迫は何事かと、後光き3人付きの車で、晝夜兼行でやつて來た。『サア、大迫を呼んだ、細かいことは大迫と相談して致せ、それから先きは俺は分らぬ』『ハハツ』只嬉しくて涙が出る。散々禮をいつて、歸らうとすると『一寸待て、あの話に來た時に何かいつたな、私の財産は僅かであるが、お上に全部献納すると、俺はさういふ風に聞いたが……』『左様でございます』『その話は、一體どうする』『それは差上げます。財産調べを致しまして、目録書きの帳面を拵へまして、そつくり差上げます』『そこまで聞けばいゝ、天龍川の治水工事をするのは、お前を救ふのぢやない。お國の爲、その沿岸の人々を救ふのだ。大政府が1個人たるお前の財産を取つてどうするか、その覺悟を、聞いたよけだ。併しお前も只それだけで歸つたら、金原の名折れになり、氣持も悪いだらう。依つてその方法も、大迫に言附けて置くから、お前の家族の生活にさはらぬ程度で幾らでも出せ、いゝか。それは大迫と、よく相談してやれ』實に氣持の良い扱ひ振りであります。

それから政府がこの工事を引受けて、天龍川の治水工事が完成した。完成する迄には10年以上掛つて居りますが、この爲に沿岸の人々は、金原を神様のやうに思つて居ります。これも偏に、大久保の爲であります。鈍重のやうな所はあるが、併しながら、考へていゝことだと、どんどん進める。これが本當の政治家の力であらうと思ふ。斯ういふやうな譯でありまして、大久保といふ人が、内務卿になりまして、その念を深く留めたのは、土木の事が一番だらうと思ひます。

これ程の人でも、政權の衝に當つて、その間の苦心といふものは、並大抵のことではなかつた。色々あつたが、中でも、大きな苦心といふものは、西郷辭職後の對策であつた。西郷は國に歸つて私學校を起し、幾千の子弟を養つて、教育して居る。これが一番困つた。それですから、大久保が西郷辭職後に於きまして、所謂西郷派の薩摩人を、治める爲には失敗もあり、失策もあつた。あれだけの政治家でも、失策があつた。

一番ひどい失策は、何であつたかと申しますと、縣令の大山綱良が來て『御離新の際に、中央に出て働かなかつた士は、論功行賞にあづかつて居ない。この不平が仲々ひどい。そこで、薩摩の士族で、戦に出ない者でも留守をして居つたればこそ、戦に出た者が、安心して働けたのだから、戦に出た者と、同じ功勞がある。だからこれに對して、公債證書を與へる』といふ談判をした。所がこれに、大久保が動かされた。只西郷が何かやりはせぬか、といふ心配があつたから、それを抑へて置かなければ後の政治がやり難い。それでこれは、無條件で容れた。『俺が引受けるから』といふので引受けたが、これがえらい失敗になつたといふのは、その時分には、その時の政府に、反對の者が中に加はつて居た。その中の一番の頭は、陸奥宗光であつた。どうかしてこの政府を引繰返してやらうといふ、考へを持つて居つた。誰から聞いたか、陸奥宗光がこれを知り、『薩摩の士族はそれでよからうが、外の士族はどうするか。大久保は怪しからぬ、自分の國の士族にだけ公の金で私恩を賣る』と言出した。そして『木戸は何だ、大きな顔をして居つても、大久保は斯ういふことを、やつて居るではないか。長州は不平士族の爲に、戦までやつた長州はこれでいゝか』そこで木戸は、顔の色を變へて怒鳴り込んだ爲に、到頭そのことは壞はれてしまつたが、慙ぢ大久保がそれを承知して、大山を喜ばしたので、大山はそのことを、電報で國に知らしてしまつた。その爲に大山は、抜き差しならぬやうに、なつてしまつた。後に大山が自分の椅子を捨て、西郷に加擔するやうになつたのも、これが一の原因であつた。さういふやうな失敗があつた。

もう一つは西郷派の士族の歡心を買ふ爲に鹿兒島縣の租税に對しては、大藏省は没交渉といふ方針を執つた。これは實に、馬鹿な話です。鹿兒島縣だけに限つて、租税の徴收は自由、大藏省の検査なし、といふのは、理窟が

立たぬばかりでなく、却つて政府の弱さを示すことになつた。そこで政府に反対の、不平士族達が、『大久保は何のかんのと、生意氣なことをいつても何が出来るか。政府が何だ、鹿児島縣といふものは日本の外になつて居るではないか、政府なんて知れたものだ』といふので、却つて薩人を増長させた。斯ういふやうなことがあつたので、大久保の苦心といふものは一通りではなかつた。

それが爲に、西郷が兵を挙げた時には、大久保はえらい覺悟をして、自分で行く譯だつた。自分で鹿児島まで、乗込んで行つて、西郷と膝詰談判をして、謀叛をやめさせる積りであつたが、それを止めたのが伊藤博文公であつた。この時分には、大久保の懐刀になつて居つたが、『あなたが、行つてはいかぬ、日本の國が大事か西郷が大事か』と、どうしてもきかなかつた。到頭、伊藤がこれを遮つてしまつて、やらなかつたが、事實、行つた所で、甲斐がないでせう。私學校の者が、大久保に對しての反感は、非常なものであるから、仲々背く筈がない。それで伊藤が拒んだのである。

愈々西郷が、兵を起したといふ時には、大久保の心配は一通りでなかつた。木戸孝允は、病氣であつたがこの事件を心配して、病氣が昂じて死んでしまつた。大久保は、體は丈夫であつたから、病氣にはならなかつたが、この事件に就ての心配は、木戸以上であつた。

その時の東京府知事は楠本正隆といふ人であつたが、愈々西郷が兵を挙げた、といふ報知があつたから、楠本は大久保の所へ面會に行つた。すると大久保は、獨りで顔色を變へて、眉を顰めて居る。楠本は口のききやうがない。いつ迄経つても、じつと睨んで居る。楠本さん、暫く立往生です。『愈々先生西郷には、自ら陣頭に立つたといふ電報が今來ました。併し如何なる英雄でも順逆の道を誤つたのですから、御心配はありませぬ。日ならず平定いたします』『もう一遍いつて見る』『ハッ』『もう一遍いつて見る』『ハッ』誰でも、もう一遍いつて見る、といはれるといへないものです。楠本はもう、大きな體を、もじもじさせて居るばかりである。『何だ、今何んといつた西郷は如何に偉くとも順逆の道を誤つたから、直きに穩かになるといつたな、子供でもそんなことは知つて居る。俺にいふ言葉でない、俺が何となく洗んで居るから、勝敗の事を考へて居ると、お前は思つたよりうが、そんな事ぢやない。俺は勝敗のことなど、少しも考へて居ない。桐野、篠原の連中や、私學校の生徒は、熊本城に立籠ることになつても、西郷が、獨り海を渡つて東京に乗込んで來て、宮城の前に跪き、『臣隆盛、唯今着京いたしました、といはれた時には、どうしたらいいか。これを討たざれば政府の威信が立たず、これを討てば、全國に漲つて居る西郷思ひの人々がどういふ風に考へるか、實に重大な問題である。俺は、その何れの道を取るべきか、今その事を考へて居つたのだ。馬鹿を言ふのも、大概にするが、いゝ』楠本は、一言もなく、恐れ入つてしまつた。

これは大久保がいふ通り、あの時西郷が二重橋の前に來て、『乾分等が、向ふ見ずの事を始めましたが私は斯うして參りました』といはれた時には、どうするか。これを討たなければ、西郷だから謀叛をしても構はぬ、といふことになる。若しこれを斬るとなると、全國にある西郷黨が、どんな事をするか判らぬ。山縣さんがあの時の策戦を講ずる時に、一番心配したのは、西郷の軍勢ではなかつた。2府12縣に跨つて居る、西郷黨といふものが、どういふ態度を執るか、といふことを、先づ最初に考へて、それから策戦を立てた位です。心ある人は、皆それ位の事は考へて居つた。そこに、大久保といふ人の智の人たる所が、現れて居ります。

そこで西南戦争が片付きまして、先づこれでよろしい、これから氣を取り直して、日本の内政を充實させて行かう、といふ事になり。考へ附いたのが、公債政策であつた。即ち、企業公債の募集を公にした。それが、1250萬圓といふ公債です。所がこの計畫が愈々實行といふことになつた時に、大久保を案ずる人や、友人、配下の者が、代る代るやつて來て、『どうもあなたは、えらいことを考へたものだ』『何が、えらい事か』『あんな無茶なことを..

『何が無茶だ』『恣々、公債とかいふものを、出すのですか』『もうちやんと、規則が出来て、2,3 日中には發表して、金を集めるやうになつて居る』『これは政府が、借金をするのだから、國民は安心して貸方になるかも知れない。併し、借りたら返さなければならぬ、政府といふものは、商賣をして居るのぢやない。税金によつて立つて居る。而もその税金には、餘裕のある譯がない。若し返せなかつたら、どうするか。一遍で政府は、天下に信を失つてしまふ。何であなたは、そんな馬鹿なことを考へたのです。公債といふものは、何年経てば返すとか、ちやんと、期限もあらうし、又それに利息をも附けなければなるまい』『返すことが出来なければ、返さなくてもいい』『へー』『公債といふものは、返さなくてもいいといふ譯ではないが、返されなければそれは仕方がないぢやないか』『そんな、亂暴な政治があるものか』『亂暴かどうか知らぬが、その外に、方法がないぢやないか。併し、公債證書を持たうといふ人は、生活に豊かな人とか、餘分の金がある人とか、兎に角、中産以上の者が持つのである。假にこれが回収が出来なくても、翌日から路頭に迷ふやうな人は 1 人もない。その公債で集つた金で、茲に土木工事を起し、或は殖産興業の途を開き、或は交通の便を圖るやうにすれば、これによつて得る一般の人の利益といふものは、何百萬、何千萬といふものであつて、それが纏て、國の富を増すものである。そしてこれによつて助かる者は、中流以下の人である。これだけの事業に對して、一時、公債の名で、富のある者が立替へて置く、お國の爲に出すのだ。又場合によれば、もう要りませぬといふて、返済を求めぬ篤志家が、出て來ないといふ譯でもない。公債といふものは、拂へなければ返さなくてもいい。國民と政府との間柄ではないか、俺はさう考へて居る』これには、談判に行つた者も、「グウ」の音もない。『まあ、折角おやりになつたらいいでせう』といふので引下がる。今の高橋さんが、これを聞くと、喜ぶだらうと思ひますが、あの人の心特もさういふやうな心特だらうと思ふ。實に大久保といふ人は、徹底した人であつた。

果せる哉、恣々これを發表した所が、應募金額が、2477 萬圓といふ額に達した。だから丁度倍額です。そんなに要らない。1250 萬圓あればいい。それで後の半分は、切落してしまつたが、この公債政策は大成功であつた。

この 1250 萬圓といふ金が集つて、どういふことをやつたかといふと、土木工事が根本になりまして、殖産興業の計畫が行はれた。築港も、今から見れば小さいものでありますが、新潟と野蒜の築港が行はれました。

それから宮城、山形、岩手、秋田、福島、米澤に互る道路の開通であつた。あゝいふ一番交通の不便な所に道路が出来たのも、これが原因であります。これで山形、米澤地方の人達が、初めて明るい所に泳ぎ出ることが出来るやうになつたのであります。

この道路計畫の中に、清水峠の國道開通工事があつた。群馬から新潟に行くのに、山の中に出来て居る 1 本の道は、その時分に、出来たものである。今ではそこから東の方に穿つた所に、大きなトンネルが、掘られてあるが大久保さんは、穴を掘ること迄は考へなかつた。それで山の上に、道が出来て居ます。

鐵道に就ては、京都と大津との間の測量費は、これから出て居るし、その建設費の一部も、これから出て居る。又建築は出来なかつたが、敦賀から大垣に抜ける鐵道の測量も、この金で出来て居る。それから東京・高崎間の測量も、この金で出来たのであります。

更に新田の開発であります。御承知の猪苗代の疏水工事も、大久保さんの考へたことであつて、あれが出来た爲に、あの附近一帯は非常な増收になつた。安積郡の如きは 3 萬石か 4 萬石に過ぎなかつたものが、一躍して 20 萬石になるといふ、好結果を擧げたのであります。それですから、あの方面の人は、土地繁昌の恩人として、深く感謝の念を抱き、郡山でしたか、公會堂に大久保さんを祀つてありますが、米の取入れの時には、そのお初穂を、大久保さんの靈前に供へてから、賣出すといふ慣習になつて居ります。この事は、あの地方の人が、道徳心に

篤い事を示す一つの美風として、推賞に足る事と思ひます。

工事は明治 12 年に着手されて、15 年に終つたのでありますから、愈々、疏水工事が出来て、水を切つて落すといふ時には、既に大久保さんは暗殺されて、この世には居なかつた。その時の福島縣令は、三島通庸さんであつた。愈々、水を切つて落すといふ日に、宮内次官の吉井友實の所に、電報を打つて、是から落成の式を擧げるから、大久保公の墓前に於て、その報告祭を行つてくれ、それが終つたら、直に水を切つて落すから、といふことになつて居た。

そこで、清水谷の大久保公の墓前で、吉井さんが報告祭を行つて、『あなたが苦心して、考へて下さつた新田開發の疏水工事が、落成いたしまして、三島から電報が参りました。今式を擧げますから、どうかお喜び下さい。』と述べて、その式が終りますと、式が終つたといふ電報を打つた。それと同時に、水を落したのであります。

三島といふ人は、一時は、當時の新聞記者から憎まれ、政黨員とも、喧嘩をしたので、亂暴で無道な政治家の如く謂はれて居るがさうではない。斯うした美しいことがある。大久保さんの死後に、縣令としてこれだけの大工事が出来た。それを自分の手柄にしてしまふのが、普通の人情であるが、4 年前に亡くなつた、大久保さんの墓前に於て、その報告祭を行つた。その時分の人の、道徳といふものは實に綺麗なものであつたと考へる。

斯ういふやうな譯でありますから、全く、大久保さんの死といふものは、惜しむべきものであつて、もう 10 年も、生きて居つたならば、もつとえらいことをやつたかも知れない。あの人が無くなつてからは、土木のことにしても、殖産興業のことにしても、據所なく進んで行つた、といふだけであつて、この人のやうに、積極的にどんどんやつて行く人が、暫くの間絶えたといふ爲に、餘程、日本の總ての文化といふものは、進み方が遅れたのぢやないかと思ふ。

そこで私共は、暗殺といふものゝ弊の、最も大なることを考へなければならぬ。これは、大久保さんだけでない。有力な政治家が、殺された後を見ましても、どうも日本人は殺した方に賛成して、殺された方には同情をしない。さういふ傾きがある。私はさういふことを、放逐で申しましたら、脅迫状が澤山に、舞込んで來た。その中無名の手紙に『貴様は今になつて、暗殺を否認しても、明治 20 年前後には、暗殺事件で牢に入つて居るぢやないか。自分のやつたことを、今になつて抹消するとは、どういふことか』といふて來たけれども、向ふが無名であるから、返事の出しやうがない。これには私は、閉口して居るが、全く若氣の至りで、やつたのだから仕方がない。今になつて考へれば、洵に馬鹿なことをやつたものですが、どうも歴代の政治家の殺された後に就て見ると、少しも國の爲になつて居らぬ。然るに今日の時勢に於ても、斯ういふことをやる、といふことは實に馬鹿なことではありますが、最近に起つた事件でも、それをやる方に、多くの方は加擔する。誠に困つたことで、斯ういふことは段々改めて行かなければ、本當に日本の國の將來は、心配でならぬのであります。

甚だ整はないことを専門の方の前で申し上げまして、恐縮であります。大久保さんは、斯ういふ譯で土木には非常に専念されたのでありますが、あなたの方のお力でお調べになれば、外に大久保さんの多くの美談があると思ひます。甚だ失禮なことを申し上げて恐縮いたします。

(拍手)

○眞田會長挨拶 大變御多忙の際に態々お繰合せ頂きまして、土木に大變關係のある大久保公の遺績を詳しく聞くことが出来て大變愉快に感ずる次第であります。厚くお禮を申し上げます。